

SDS ゲートキーパー養成講座 報告書

2023 年 11 月 14 日

報告者：山口大学医学部 SDS 支援システム開発講座

開催日時：2023 年 11 月 14 日(火) 14 時 40 分～16 時 10 分

開催場所：ときわ湖水ホール 大ホール

参加定員：40 名

参加対象者：教職員等

参加申し込み方法：宇部市障害福祉課へ申し込み 宇部市役所 教育支援課

開催形式：会場参加のみ

講演者：山口大学医学部社会連携講座 山根俊恵教授

参加人数：54 名

概略：

早期に SDS (Social Distancing Syndrome：社会的距離症候群、偏見や誤解を生まない用語として、いわゆる「ひきこもり」に代わる用語として提案) の当事者やその家族に気づき、思いを傾聴し、苦悩を理解して適切な支援機関につなげ、見守る「SDS ゲートキーパー」の養成、また SDS に関わる支援者のスキルアップ事業の一環として、本講演が開催された。

内容：

ひきこもり支援の第一人者である山口大学医学部 SDS 支援システム開発講座 山根俊恵教授により、「SDS ゲートキーパー養成講座」の講義があった。

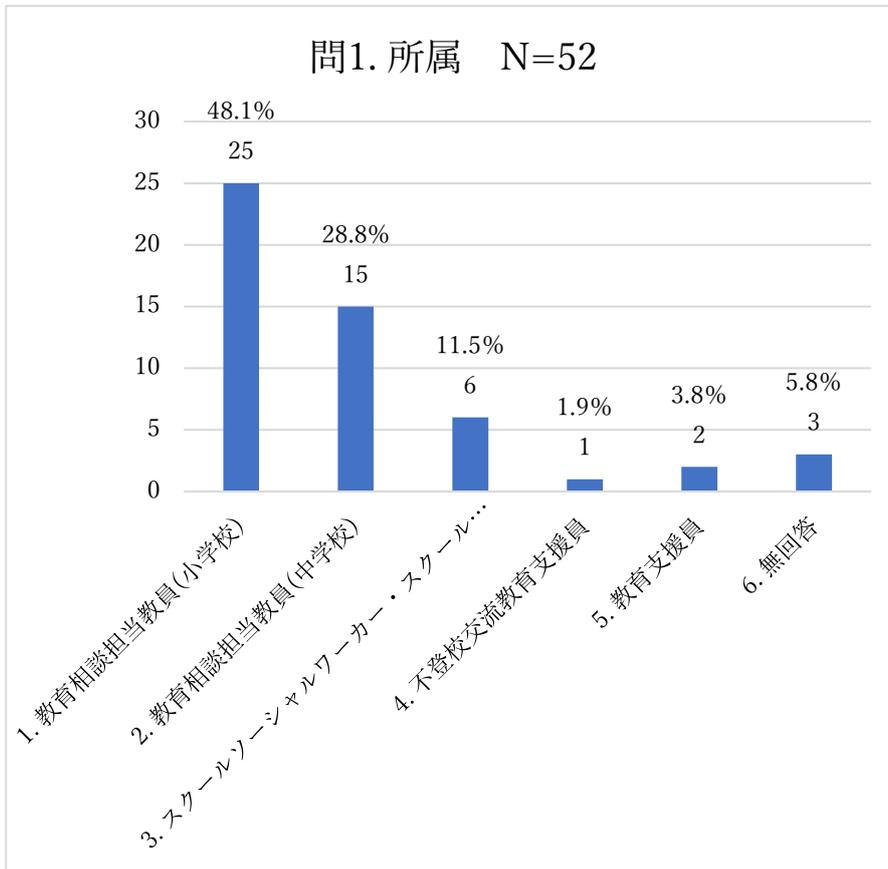
以下、終了後のアンケート結果 (p2～12) を添付する。

SDS ゲートキーパー養成講座アンケート集計結果

回収状況

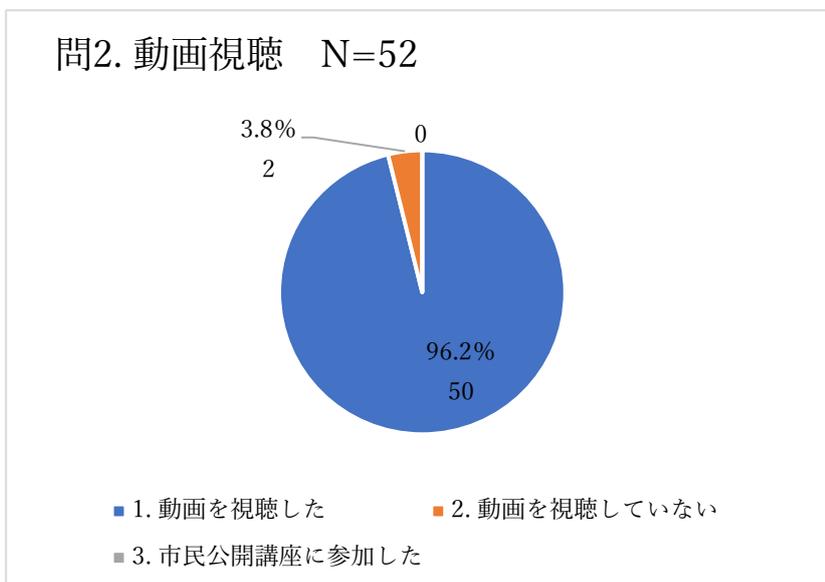
参加者 54 名にアンケート用紙を配布し、52 枚の回答を回収した（回収率 96%）

問 1. 参加者の所属



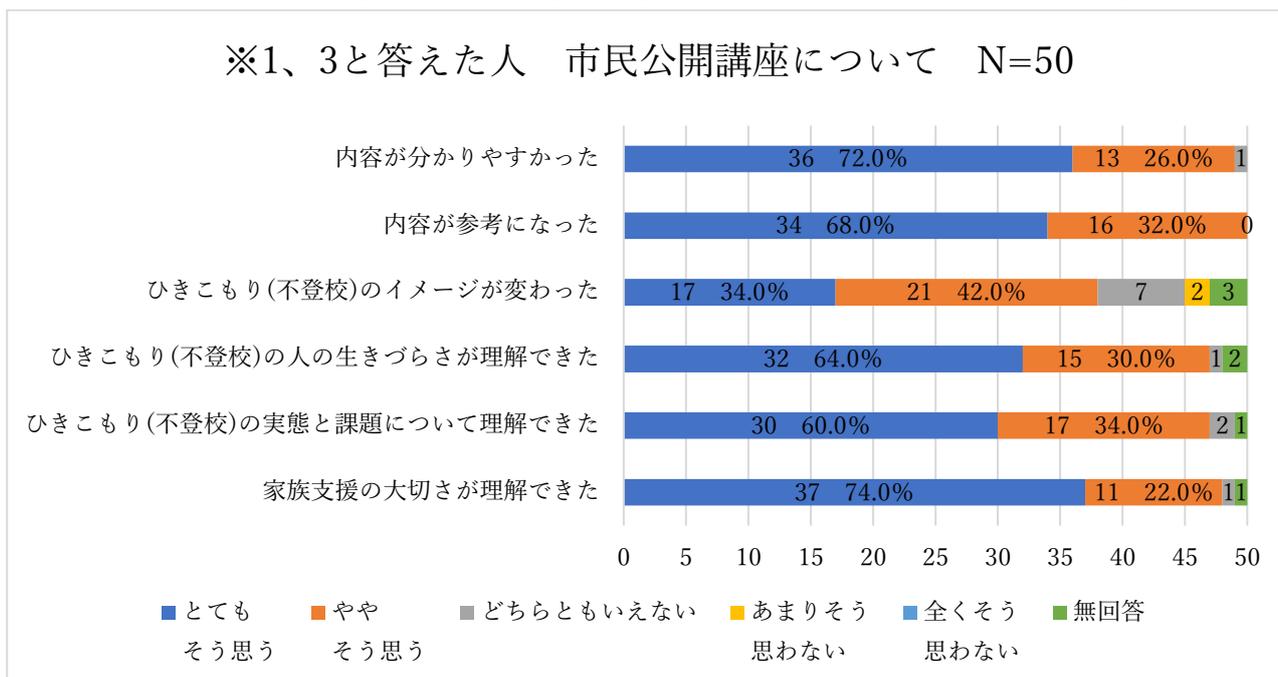
所属は、「教育相談担当教員(小学校)」25 名、「教育相談担当教員(中学校)」15 名、「スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー」6 名、「不登校交流教育支援員」1 名、「教育支援員」2 名であった。

問 2. 市民公開講座「誰もがなりうる『ひきこもり』の正しい知識」の動画視聴



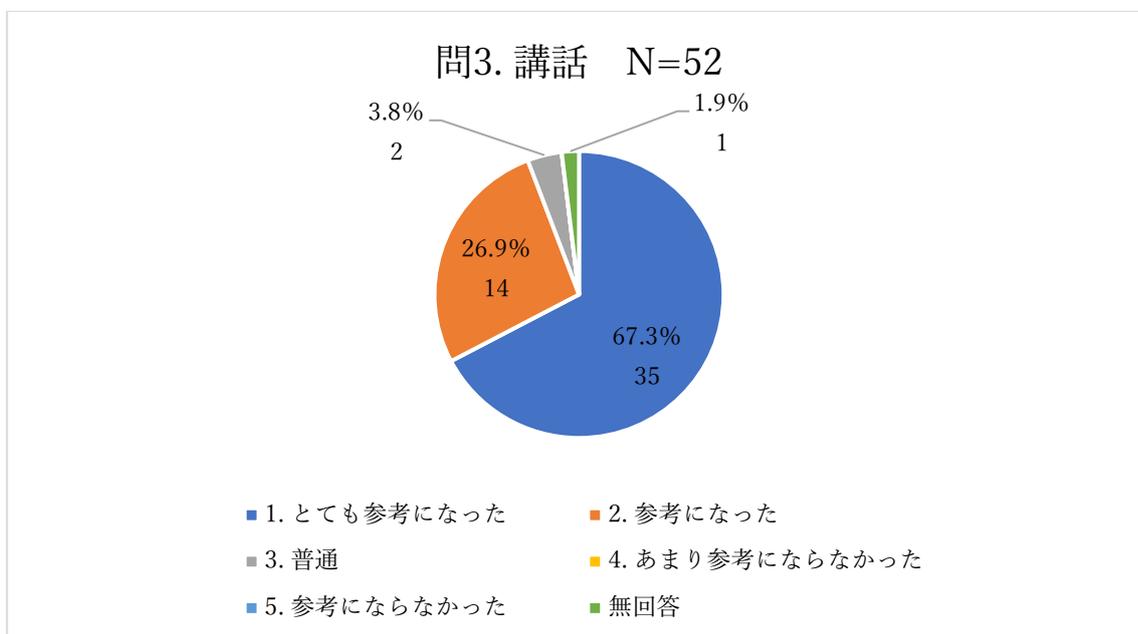
「動画を視聴した」が 50 名、「動画を視聴していない(後日、視聴する予定)」が 2 名であった。

※1.3 と答えた方 動画を視聴(市民公開講座に参加)して、どのように感じましたか。



「家族支援の大切さが理解できた」が37名、「内容が分かりやすかった」が36名、「内容が参考になった」が34名、「ひきこもり(不登校)の人の生きづらさが理解できた」が32名、「ひきこもり(不登校)の実態と課題について理解できた」が30名、「ひきこもり(不登校)のイメージが変わった」が17名であった。

問3. 講話



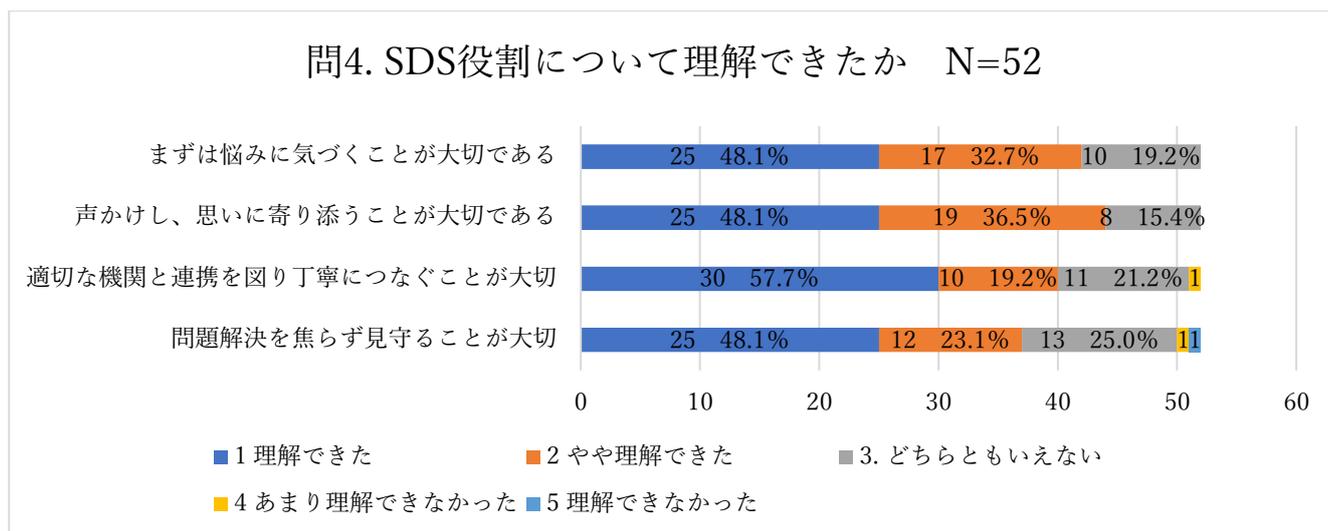
「とても参考になった」が35名、「参考になった」が14名であった。

参考になった内容

行動には理由があるということ。
登校への促しやプリント物持参等の家庭訪問等が登校の意欲向上よりもさらなる学校への気持ちを減じてしまう…とすれば教諭、支援員程度の者がこれに取り組めないのではないかと…という気持ちになった参加者がかなりいる。
家庭訪問が本人だけでなく家族の負担にもなるということ。
ひきこもりや不登校の支援をするにあたって、家庭環境のせいだと考えてしまうことがよくあるが、保護者自身も生きづらさを抱えていることがあると学び、ゲートキーパーの一員として気づき、声かけをし話を聴く、つなぐ、見守るを実践していきたいと思いました(2名)
具体的な事例や支援方法をお話いただき、とてもわかりやすく勉強になりました(4名) 発達障害の生きづらさのお話は特に心に残りました。
家族支援の大切さを改めて知ることができた。そこから学校の支援として何ができるかを再度考えていきたい。
本人の世界観を想像することの重要性がよくわかりました。多いに共感する点が多かった。一番は不登校生をそのままにしておいても自力で動き出すことは不可能に近く、介入者(支援者)の重要性をつくづく実感しています。
子供だけでなく、保護者の気持ちや対応も大きくかかわっていることが分かった。保護者側に立つ機会は少ないのでよい機会になった。トラブルが解決しても不登校になってしまう子にとって学校という存在が条件反射のようになっていると理解できた。
不登校の子どもの思い(原因)はさまざまということがよくわかりました。思いを聴くことの大切さをあらためて感じました。家族まるごと支えることの大切さもわかりました。
本人の世界を想像し共感すること、安全な環境を整えてあげることの大切さを学びました。(2名)
焦らず、慌てず、あきらめずの意味がわかりました。
「対話」が大切でアドバイスや叱咤激励は対話ではないということ、よく話を聴き関心を示すことが必要だということ。
「困っていると言えないから困っている」人から困りごとを引き出してあげられるようになりたいと思いました。
SDS 支援で大切なこと、本人及び家族にとって良き理解者になること(2名)
学校教育において担任にできることは、人間関係づくりだと思います。その子とつながることが一番であり友達同士をつなぐことも必要だと思います。1回不登校となった経験がありますが、環境が変わること、家族の支えはとても重要だと思います。
問題行動や子どもの様々な言葉から、子どもの真の苦しさを理解すること、親に寄り添うこと、本当に必要な支援を見極めること。
引きこもりへの対応。

不登校とひきこもりの関係について
具体的な事例を説明くださったところ。本人のとりまく環境をもう一度考えてみること。
本人の困り感や悩みを理解しようと努めることの大切さがよく分かりました。本人の望まない支援は本人を苦しめることにもなりうることもあると知り、家族だけでなく教職にある私自身も今後の支援の仕方に役立てたいと思った。
初期要因からトラウマ反応が起こってしまい、原因が解決しても学校全体にしんどくなるということを知り、はっとさせられました。初期対応の大切さや本人家族全体への支援の大切さを改めて感じました。
肯定的に家族と向き合い、本気でひきこもり児童に自分を「敵ではない」と感じさせるようにすることが大切だということ学びました。
つい私の使っている言葉は良かったか反省しました。
もともとの性格、生きづらさがあるって一定の環境の中で不登校やひきこもりが起きているということ。
「本人はこう感じている」という視点が大変勉強になりました。家族の視点、支えるとはどういうことか、学校の対応の仕方など色々考えさせられました。
解決する(外出する、登校するなど)ありきで支援していたかもしれないと自分の支援を振り返ることができました。親、保護者、当事者の気持ち、苦悩への理解、共感できるように信頼関係が築けるようにあります。
事例の詳細とその後について、どのような言葉かけが良いか悪いか。
家庭が安全な場になるように、ということを常に意識してこれからも子どもたち、保護者と向き合っていきたいと思います。具体的な声かけや事例のお話がとても参考になりました。ありがとうございました。
当人も関わる人たちも様々な感情を抱いているものだと思います。変化がなかなか見れず焦りを感じてしまうのも仕方のないことだと思います。しかしながら寄り添うというものが具体的に分かれば焦らず余裕がもてるのかもしれないと思いました。
問題解決アプローチ。見守りながら本人を信じて自立へとつなげる。

問4. 講座を受講して、以下の SDS ゲートキーパーの役割について理解できましたか。



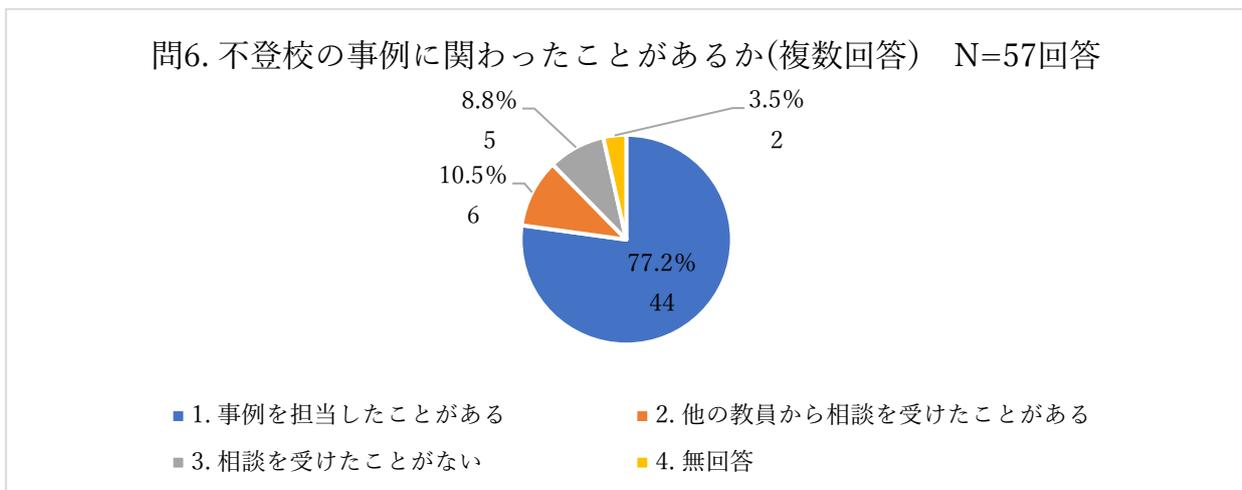
「適切な機関と連携を図り丁寧につなぐことが大切」が30名、「まずは悩みに気づくことが大切である」「声かけし、思いに寄り添うことが大切である」「問題解決を焦らず見守ることが大切」がそれぞれ25名ずつであった。

問5. 講座を受講して、今後不登校の児童やその家族から相談を受けた際に、気をつけたい事や実践したい事がありましたらご意見をお聞かせください。

本人の苦しさを理解して対応する。「見守り」ながら本人に否定的な言葉かけ、行動をとらない。一緒に気持ちに寄り添い聞くに徹する。(6名) 心の声を聞く。
1つにとらわれず、様々なアプローチを検討したいと思いました。
解決ありきでなく信頼関係を築くこと。
児童生徒の思いを、言葉と(声を)つぶすことがないよう対応していきたいと強く思いました。
受け止めて困り事を聞く。一般論を押しつけない。まずは関係を築くこと。
本人の苦しさ(困りごと)をまずは理解していきたい。(3名)
その子その子によって悩みや家庭の状態もちがいが、親の思いもちがうのでとても難しいと思います。
生徒や家族が抱えている背景を受け止め、支える視点をもちたいと思った。
見極めが難しいと思っています。学校としては家庭訪問や来てもらうなどしています。どの生徒がどんな状態か実態の認知が甘いかもしれません。
「普通」をおしつけるのではなく理解するということに気をつけたい。
表面だけで判断せず本人の世界観を想像して関わっていききたい。また解決に焦ってしまうことがあるが慌てず見守るということも意識していきたい。
否定的な言葉を使わない(4名) 思いを否定しない。
まずは状況を聴き、そしてどのような支援が必要か、関係機関とつなぐ必要があるかを考えて一緒に考えて適切に行動する。

不登校の児童本人だけでなく家族全体を支えることを意識して支援を考えていきたいと思いました。また助けてと言えなかったり、困っていると言えないから困っている子ども達もいることを忘れず対話と傾聴を大切にしたいと思いました。
環境の大切。待つことの大切さ。
共感からはいる。あせらない。でも対応についてはどのようにしていこうかなと考えます。共感して寄り添う(3名)
不登校になる前に予防する。その子と教師がつながる。焦る気持ちも出るかもしれないが見守る。
本人の思い、家族の思いをしっかりききたいと思います。理解しあう事が大切だと思うので、その手助けができるといいなと思います。
暴言=苦しさとして受けとめる。表面だけを見ない。気持ちを想像する。
こちらから多くを話さない。本人やその家族の話を聴くことを大事にする。本人が今思っている事や考えていることが何かを本人の言動から理解するようにする。
本人や家族を傷つけないことにより気をつけたいなと思いました。思いを受けとめることはこれまでも気を配ってきましたが、悪循環から抜け出す支援に対して力不足を感じてました。今回の講座で多くのヒントをいただきました。気づく為の支援、問題の可視化を実践していきたいです。あと焦らず見守ることを心にしっかり刻んでおきたいです。
本人の気持ちをしっかり吐き出させ、その言葉を受け止めることに気をつけたいと思います。結果をすぐに求めずあきらめず長い目で対応していきたいと思います。
仕事、職務としてベストをつくすのではなくて、自分の家族の一員として接遇できるようにしたい。
良かれと思ってやる事が本人や家族を苦しめている可能性があるということ。

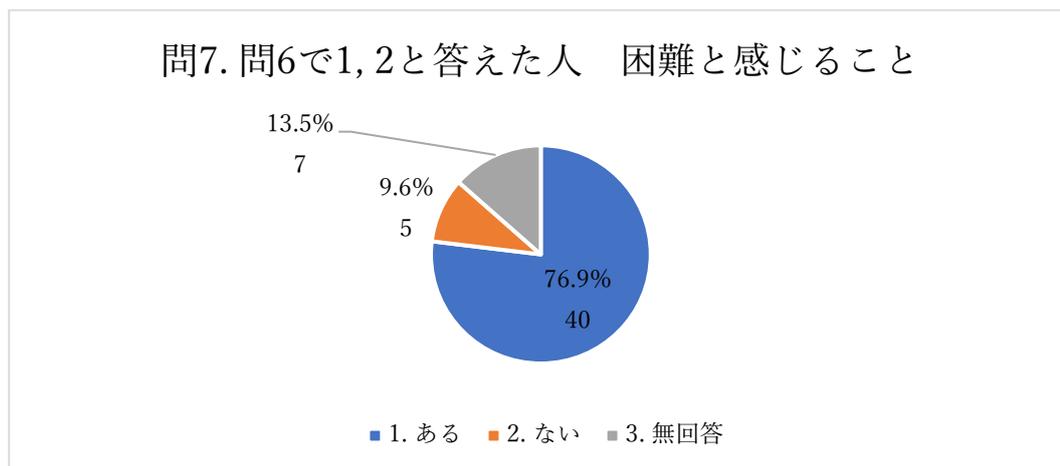
問6. 不登校の事例に関わったことがありますか。



「事例を担当したことがある」が44名、「他の教員から相談を受けたことがある」が6名、「相談を受けたことがない」が5名であった。

問7. 問6で1、2と答えた方にお聞きします。

不登校の事例に関わった、または相談を受けた際に、困難と感ずること



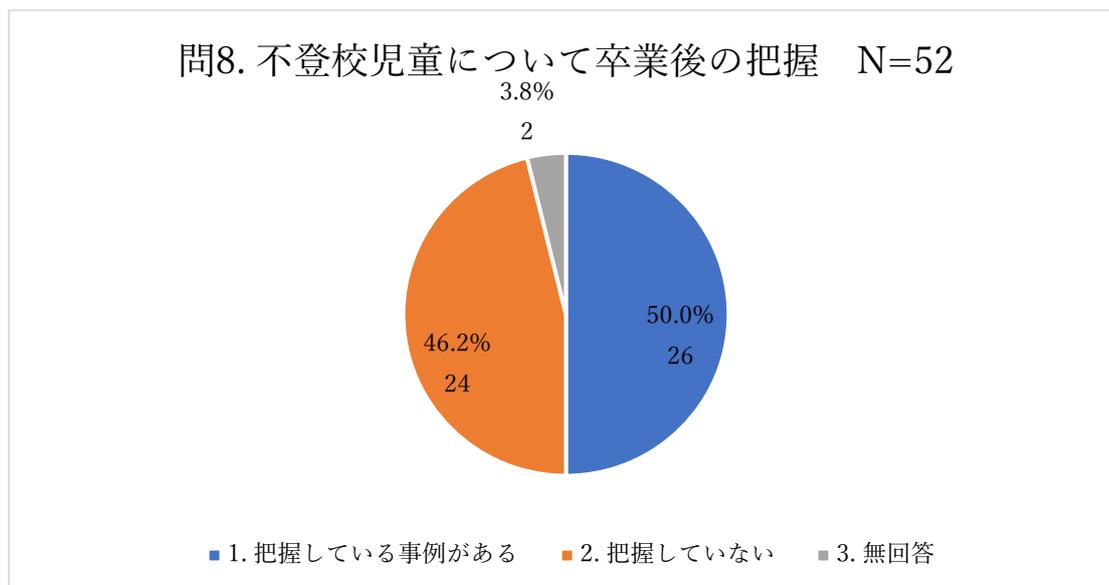
不登校の事例に関わった、または相談を受けた際に、困難と感ずることが、「ある」は40名、「ない」は5名であった。

※どのようなことが困難でしたか。

わかっていながらも本人の将来を心配する余り、マイナスの関わりをしてしまうこと。
不登校気味になっている時に対処していれば、これほどこじれなかったかも…。保護者の子育てに対する「気持ち」に甘さや未熟さが感じられ協力が得られない。
児童生徒本人の気持ち、保護者の気持ち、教員(主に学級担任)の気持ちをすり合わせ対応することに難しさを感じるケースもある。 学習面へ困難を訴える生徒へは、早めのアプローチを小学校段階でしてほしいと思うがなかなか進まず中学生になり、本人が学校への生きづらさを感じるケースもある。
なかなか本人に会えない。 実際の支援経験が浅く、自分自身の力不足に不安がある。(アセスメントのポイント、対応方法、勉強していきたいです。)
別室で不登校傾向の8人と関わっていますが、なかなか自分の思いや考えを言葉にする生徒が少ない。まだ半年程度の関わりで会う回数もそれほど多くないので生徒との人間関係が築けていないこともあるかもしれないが、何を考えているのだろうかと思うことがある。こちらから聞くことはあまりせず、そっと見守るようにはしているが、本音で会話できていないように思う。
不登校の原因が学校生活の中でのことではなく、家庭生活や家族関係にあること。
親子関係の難しさ。家庭介入の難しさ。(3名)
保護者の励まし方。原因が分からず何にアプローチすれば良いか分からなかった。(3名)
心に寄り添おうにも、本人が心を閉ざしている時期は何もできなくてとても難しかったです。本人が少しずつ心を開いてくれたり学校に向かってくれたりするようになると少しずつ

<p>つ寄り添い理解し登校に向かうようになりました。</p> <p>今現在関わっている子供についてはまだ本人の世界観を理解するまでに至っていないので今後努力していきたいと思います。</p>
<p>昼夜逆転、生活リズムの乱れなどがある。学習も苦手学ぶことがあまり好きではない。</p>
<p>本人の心的状況や特性による人間関係づくりの難しさがある時に、状況を改善することがとても難しい感じがします。</p>
<p>本人、保護者の思いをくみ取れない。</p>
<p>すぐに解決しないことは分かっているつもりだが、成果が出ない期間のモチベーションの保ち方。</p>
<p>親にアドバイスをするが、やってはいけない行動を繰り返す人で難しい事が多い。</p>
<p>なかなか苦しみ(原因)が確定できない。家庭環境についての問題で学校が入りにくい。</p>
<p>別担任だった時、自分は直接かかわることができないため、助言もしようがない。そのような事例がある程度自分の経験にないと難しい。経験測で語ってしまうため手立てが先行してその子の思いや願いが共有されにくい。</p>
<p>学級に戻す動作は困難でした。</p>
<p>本人の気持ちの理解(言葉にしないので分かりにくい)</p>
<p>本人と話ができない。親と話すことができるが変化が何も見えない。</p>
<p>関係機関との連携の仕方(普段関わりがない。顔がわからないため) 長期の対応や連携が難しい(教員やSSWの異動等)</p>
<p>保護者から家庭訪問を拒否され勤務時間内のコンタクトが難しい状態なこと。</p>
<p>外部機関との連携(3名)。医療、福祉、教育とも支援に入っていたが各々何をしているのか把握できていなかった。</p>
<p>つながり方、勤務予定の調整。</p>
<p>会えない場合どう関わったらよいか分からない。</p>
<p>家族の在り方が好ましい方向に変化することに対して関わるだけの時間や労力がない。</p>
<p>子どもにどう声かけをしたらよいか、どうつなげていったらよいか、子どもの様子を見ながら考えることの難しさを感じました。</p>
<p>様々な問題が絡み合って不登校となっているケースが少なくないため、一つ一つのケースに合わせて対応していかなければならないこと。学校の関わりがうまくいってなかったのか、転校という形で関わりが終了したケースがあった。</p>
<p>学校行かせたいという大人の思いと子どもの板ばさみになる瞬間。</p>
<p>本人」と会えない、親のうつ状態。どう親をエンパワメントしていくのか現在進行形で悩んでいます。</p>
<p>継続的に支援を受けてくれるか。良いときもあれば本人の体調が悪いときもある。こちらにも気長に関わりをもたないとメンタルが続かないと思います。</p>

問 8. 不登校であった児童について卒業後の様子を把握しているかについて



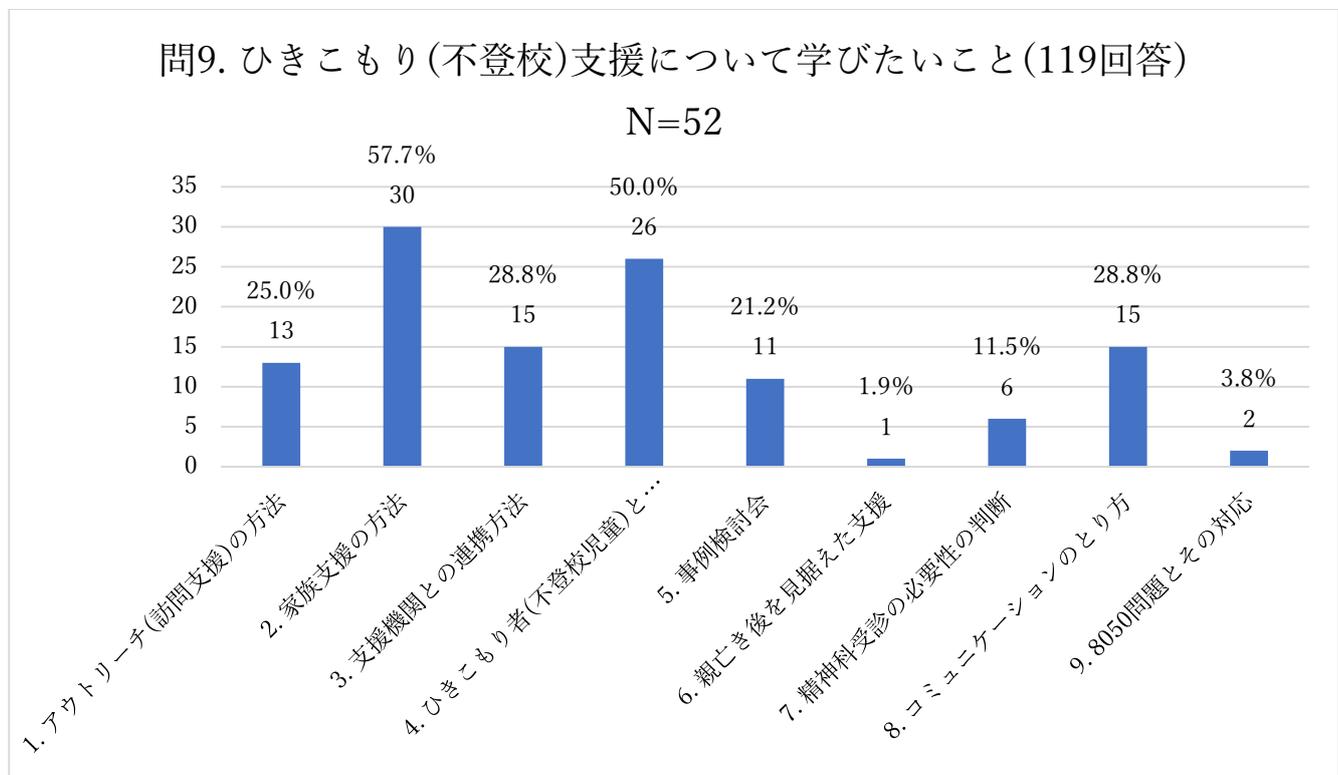
「把握している事例がある」が 26 名、「把握していない」が 24 名であった。

※把握している事例についてお聞かせください。

卒業後の様子を聞き取れる場所であれば情報交換できます。小中連携などで。
中学 3 年時に支援→卒後 1 年家居。→総合支援学校入学。自分で歩いてスクールバスのバス停まで行ける。
中学校での登校の様子を聞いている。
一度進学したが、やめてしまった。しかし途中から別のフリースクールにいきはじめた。
高校との情報交換。
定時制高校に入学。卒業できたこと 5 名。休学等 4 名
無事就職(常勤の) 高校進学後中退など
小学校から不登校(保健室登校)の子ども。中学に進学し全く登校できずにいたが、日中小学校へ顔だすことがあったため、中学へ連絡し情報共有をした。
高校進学後、1 学期中 10 日ぐらい休みで頑張っている。保護者もほどよい見守りを継続中。
あまり人と関わるのが少ない通信制の高校に通いながら自分のペースで将来を探している。
4 年生の時不登校気味でちょくちょく休んでいたが 5.6 年はずっと来ることができていた。担任の存在が大きく 4 年生の担任と合わなかった。それからは部活も学校も楽しんで通ったり、活動したりしている。
中学校のふれあい教室の先生との情報交換会で現状をお聞きしています。
小→中は不登校が悪化しているケースが多い。
中学校でも登校できない時期はあったが、現在は登校できるようになっている(2 名)

コンビニで働きながら定時制高校や通信制の学校に通っている。そのままひきこもりになった話は聞いていない。
小学校6年生で不登校になり、中学校では校内の不登校教室に定期的に通えるようになりました。その後通信制の高校に入学したと聞きました。
中学校でも不登校の事例。子どもと親のサポートセンターに行くようになり、通信制高校も行くようになり看護師になった。
普通高校2年のときに不登校になり通信制の高校に転学。その後大学受験して合格。大学に通うことができた(1名) 仕事に就き友だちもできた(1名)
四大まで行って幼稚園教諭資格をとり後に家庭を持って幸せに暮らしています。他には食堂に勤めているケースもあります。
児童については中学校(校区内)の養教や校内ふれあい支援員等に状況を把握することができるが、生徒については連絡も様々となり把握が難しい現状にある。
高校(公立)に何とか入学できた子やその親からお礼の手紙をいただき、また本人が中学校まで会いに来てくれ「この制服よ、見て。それから時々休んだこともあるけど、がんばって行ってます…」など話してくれた。
定期的に顔を見せに来てくれる。季節のあいさつに近況を添えてくれる等その生徒たちに関しては、将来の目標を持って高校への登校も続けている。

問9. ひきこもり(不登校)支援について、今後学びたいこと複数回答可(3つまで)



「家族支援の方法」30回答、「ひきこもり者(不登校児童)とのかかわり方」26回答、「支援機関との連携」と「コミュニケーションのとり方」がそれぞれ15回答、「アウトリーチ(訪

問支援)の方法」13回答、「事例検討会」11回答、「精神科受診の必要性の判断」6回答、「8050問題とその対応」2回答、「親亡き後を見据えた支援」1回答であった。